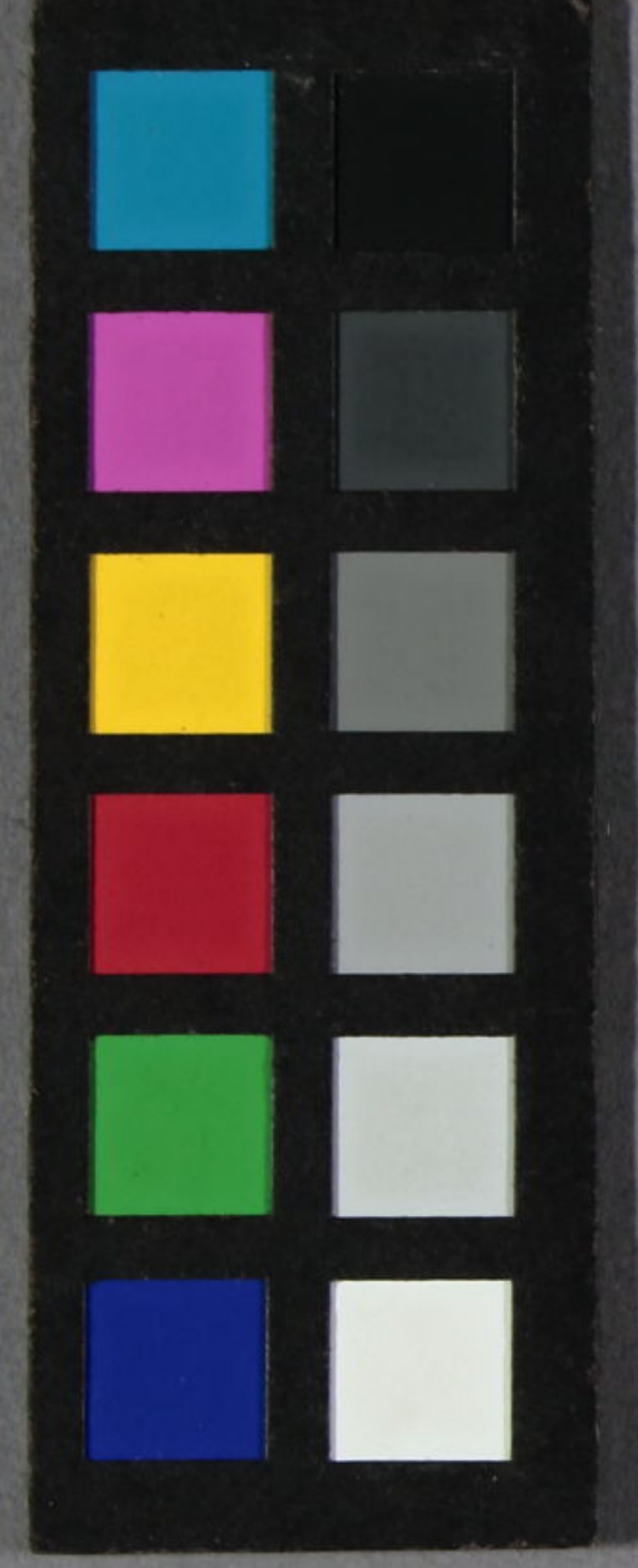




鴻
經
子
方
類



東京

泉峯

古人よる部 終之部 目錄

		時終之部	
名月	初十	時終之部	二
三月月	三	終之部	四
星月	五	終之部	五
星月	六	終之部	六
星月	七	終之部	七
星月	八	終之部	八
星月	九	終之部	九
星月	十	終之部	十

秋風	十一	紗子入	十二	扇切丸	十二	拾五公	十二
秋草	十二	西路	十三	五方	十三	後の舟入	十三
二百十日	十三	船重	十四	野分	十四	甲船	十五
秋結	十五	木綿取	十五	田代	十五	咲船	十五
秋草	十六	後ひき	十六	洋舟入	十六	秋入	十六
八舞	十六	狗塚跡	十六	放生舟	十七	衣辻	十七
鳴子	十七	室山子	十七	川板	十八	三ノ目	十八
さし結	十八	おのこ	十八	紗七巻	十八	船夫	十八
河結	十九	鏡	十九	扇結	十九	沙急	十九
針の糸	十九	新うけ	十九	依	十九	漸急	二十
秋草	二十	夜草	二十	新色	二十一	あうり	二十一
秋草	二十一	秋草	二十一	秋草	二十一	秋草	二十一
一草	二十四	極りの部	二十四	草子丸	二十五	あうり	二十四
秋草	二十五	首の糸	二十五	えん	二十六	あうり	二十六
秋草	二十六	男一	二十六	草子	二十六	あうり	二十六
秋草	二十七	秋	二十七	秋	二十八	あうり	二十八
秋草	二十八	秋	二十八	あうり	二十九	あうり	二十九
秋草	二十九	秋	二十九	あうり	三十	あうり	三十
秋草	三十	秋	三十	あうり	三十一	あうり	三十一
秋草	三十一	秋	三十一	あうり	三十二	あうり	三十二
秋草	三十二	秋	三十二	あうり	三十三	あうり	三十三
秋草	三十三	秋	三十三	あうり	三十四	あうり	三十四
秋草	三十四	秋	三十四	あうり	三十五	あうり	三十五

好く	三十四	せし	三十四	石の葉	三十四	かゆ草	三十四
木犀	三十五	木の葉	三十五	葉葉	三十五	後りこ	三十五
木の子	三十五	せせ	三十五	葉	三十六	熟柿	三十六
魚	三十七	生類之部		葉	三十五	おろ	三十六
秋の蟻	三十七	秋の蟬	三十七	秋の蟬	三十七	秋の蟻	三十七
さうりくす	三十八	秋の蚊	三十七	葉	三十八	定あ	三十八
いあ	三十九	たき	三十九	いやく	三十九	鳩鳩	三十九
せせ	四十一	ひやく	四十	海き	四十	雁	四十
帰る	四十一	鴨	四十一	木つさ	四十一	うろ	四十一
鳩	四十二	鴨	四十二	ひやく	四十二	おろ	四十二
鳩	四十二	鴨	四十二	葉	四十二	おろ	四十二
冬を結	四十三	鴨	四十三	葉	四十三	おろ	四十三

古人五百歌句集

穰之部

南強 曠畑菴龜足 校合 行無草瓜少

名

名や池をめぐりて水すか
 明月や門のまゝしあはれ
 之井ちの門をくまやりの
 名くくやんつあもあおひ
 名ややんあくはの影
 名くやんくまはひあゆ

其角 嵐子

明

あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう

去来 執人 柘岡 本由 輪十 信純 昌彦 山方 智存 利牛 西隆 柳枝

存

あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう
あつとわづらうやうをよめるのたう

海幸 毒園 珠涼 本藤 山輝 梅路 志理 石翁

見

る

聖御くし人々を休まぬらんが
喜ぶれうらむらむとて中世に
系人とあはれむ形とて母えり
蜀重の景をさふあつたねえ
川原の白雲をまうくねえん
麻のくもを踏折る戸のねえん
ちりけの歌はうらふらうえり
舟月の道はうらうらとねえん

若
去来
豊城
西条
杉風
浪化
支考
支考

海よりあつたやうなあねの
河をさうらうらとあてもねえ
るのねえん

尚白
畧
執人

ね

アハ影やさう行ぬもやうな
とねえのまを麻の穂や秋の
完理和をさうらうねのま
妙らうとてねえのねえん
かぶをさうねえのねえん
山をさうねえのねえん
アハ影やさう行ぬもやうな
とねえのまを麻の穂や秋の
完理和をさうらうねのま
妙らうとてねえのねえん
かぶをさうねえのねえん
山をさうねえのねえん

若
去来
豊城
西条
杉風
浪化
支考
支考

おゆ

たしわ平むらふに水のそまふよ
ゆき神と月をなまけ神ぬを
そくちをてゆく二のたさぬを
アム人も多しおとぬのたさぬ
ゆき神と月をなまけ神ぬを

三神
まは
素
荒
本

之
ね

何事のアとそはもぬは之のぬ
このぬのぬをぬのぬはまぬ
すすくとぬをぬぬぬぬぬぬ
このぬのぬをぬぬぬぬぬぬ
このぬのぬをぬぬぬぬぬぬ

神
曾
已
柳
女

ね
ね

何事のアとそはもぬは之のぬ
このぬのぬをぬのぬはまぬ
すすくとぬをぬぬぬぬぬぬ
このぬのぬをぬぬぬぬぬぬ
このぬのぬをぬぬぬぬぬぬ

ま
思
子
松
見

十のぬをぬぬぬぬぬぬぬぬ
やすくとぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

三

十の友 後の海

いさよのしやまのうのきくすのうら
勿徒よのきくすのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
十の友のしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら

太来
明奴
猿怪
乙中
作不
多輝

本をきくすのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら

いさよ
太来
明奴
猿怪
乙中
作不
多輝

いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら

いさよ
太来
明奴
猿怪
乙中
作不
多輝

星月夜

いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら
いさよのしやまのうのきくすのうら

いさよ
太来
明奴
猿怪
乙中
作不
多輝

法
日

其の法は秋の法也
其の法は秋の法也

和歌
抄候

文

文の法は秋の法也
其の法は秋の法也

其の法
其の法

業

業の法は秋の法也
其の法は秋の法也

其の法
其の法

業

業の法は秋の法也
其の法は秋の法也

其の法
其の法

秋
抄

秋の法は秋の法也
其の法は秋の法也
其の法は秋の法也
其の法は秋の法也
其の法は秋の法也
其の法は秋の法也
其の法は秋の法也
其の法は秋の法也
其の法は秋の法也
其の法は秋の法也

其の法
其の法
其の法
其の法
其の法
其の法
其の法
其の法
其の法
其の法

七 又

中より中より中から中へなるなりぬの
花のさき花のつらさなりぬの
秋もすさむるの秋の明もす
たつた中から中へなるなりぬの
さきさきの中へなるなりぬの
大内の中へなるなりぬの
中へなるなりぬの
中へなるなりぬの

鳥
鳥
鳥
鳥
鳥
鳥
鳥
鳥
鳥
鳥

立 琴

立 琴
たつた中から中へなるなりぬの
たつた中から中へなるなりぬの
たつた中から中へなるなりぬの
たつた中から中へなるなりぬの
たつた中から中へなるなりぬの
たつた中から中へなるなりぬの
たつた中から中へなるなりぬの
たつた中から中へなるなりぬの
たつた中から中へなるなりぬの
たつた中から中へなるなりぬの

乙
乙
乙
乙
乙
乙
乙
乙
乙
乙

川

静 橋

静 橋 の 系

静 橋
静 橋
静 橋
静 橋
静 橋
静 橋
静 橋
静 橋
静 橋
静 橋

乙
乙
乙
乙
乙
乙
乙
乙
乙
乙

予
菊
方

命をうけて社を去るにありけり
のあつとてうけりかきかき
美をうけての仙傳ふかきのかき
らんらんの中家のまゝのまゝ

橋子
白雲
玉露
甲冑

撰
待

松林やまのまゝのまゝのまゝ
甘くまのまゝのまゝのまゝ
君志は松林のまゝのまゝ

松林
待
松林

言
灯
篋

言の灯篋をまゝのまゝのまゝ
山手道のまゝのまゝのまゝ
竹まのまゝのまゝのまゝ
言の灯篋のまゝのまゝ

言
探
却
其

灯
篋
途
終
送
中

白法のまゝのまゝのまゝ
竹まのまゝのまゝのまゝ
竹まのまゝのまゝのまゝ
竹まのまゝのまゝのまゝ
竹まのまゝのまゝのまゝ
竹まのまゝのまゝのまゝ
竹まのまゝのまゝのまゝ
竹まのまゝのまゝのまゝ

竹
竹
竹
竹
竹
竹
竹
竹

玉身

糸

玉よりくもも焼塔のりふりか
はなれしこもさうめしと鬼もあ
らまらぬのりくたけに玉さつ
かなものもさえぬはしと鬼
もさもあて候の世の縁舞うが
玉さつとさうめしと前子とらあ
糸のさうめしとがさうめしと
玉さつとさうめしとさうめしと
玉さつとさうめしとさうめしと
玉さつとさうめしとさうめしと
玉さつとさうめしとさうめしと
玉さつとさうめしとさうめしと
玉さつとさうめしとさうめしと
玉さつとさうめしとさうめしと

了母
香子吟
去来
嵐を
太妙
明子
酒中
北坡
藤舟
雲口
几心吟

柳 經

蓬 飯

精兵の好きし人をあめり
當時にさうめしと玉さつ
魂柳の奥あけしと柳の影
歩はたぬとさうめしとさうめしと
はなれし人さうめしと玉さつ

柳經やさうめしとさうめしと
さうめしとさうめしとさうめしと
柳經やさうめしとさうめしと
柳經やさうめしとさうめしと
柳經やさうめしとさうめしと
柳經やさうめしとさうめしと
柳經やさうめしとさうめしと
柳經やさうめしとさうめしと

大草
珠風
去来
冬時
而明
如新
香角
白梅
舎心
一松友
去来

墨

信

生

身

金

丸

踊

如

丸

家より信杖子志く機の墨を糸
尺一斗も強子に形してたらし
向津を死の秤やる巻きし
灯籠の形子墨を人子お世世

生身總所のさくらぬ歌又
せめて魚の身より生身
たのしみつるころてはひ
かよふ玉とその上になく

踊るまははとふ破て金
知るる身舞かて踊る
何人の形ぬらしてまて踊る

一ちりて侍人舞をたぬ
踊る舞のあはれを
白ひ舞は玉端の中か
踊るの言なき娘のまはひ
門くの宮かぬぬえり

如所信杖子の形の
世より信杖子の形の
信杖子の形の
信杖子の形の
信杖子の形の
信杖子の形の
信杖子の形の

丸

去来

其角

一角

其角

方山

波村

龜洞

中

野

野

野

野

野

野

野

其角

許六

其角

其角

其角

其角

其角

名火殘暑

てある名火のりも相まひりて
 け次を法きいりて名火のり
 ちりたる名火のりも相まひり
 川はらわす名火の中も相まひり
 亡月人の名火のりも相まひり
 名火のりも相まひり

其角
 外寂
 柱夕
 名火
 名火
 名火

名火のりも相まひり
 秋も中も相まひり
 予も中も相まひり
 夕暮も相まひり
 相まひりも相まひり

曲翠
 乙生
 夕暮
 夕暮
 夕暮

相撲

よれ名火のりも相まひり
 却も中も相まひり
 角力取も相まひり
 十八も相まひり
 中事も相まひり
 惜も相まひり
 角力取も相まひり
 相撲も相まひり
 世も相まひり
 名火のりも相まひり
 名火のりも相まひり

其角
 左角
 荒吉
 相撲
 史那
 名火
 許六
 名火
 名火
 名火

舟子

舟子志願を成すの志願あり

舟子

扇

秋の風おこす扇を扇ふ秋の扇

小春

捨用

柳の葉のすくすくを捨用

柳

神

神の居る所を神

神

山

山の山を山

山

山

志願を成すの志願あり
舟子志願を成すの志願あり
扇を扇ふ秋の扇を扇ふ
柳の葉のすくすくを捨用
神の居る所を神
山の山を山

舟子
扇
柳
神
山

雨務

於雨務や二層をきあはる人あき
物たりとのあき平定方のあき
結をふと東のうきすすあき
あきうきおきあきあきあき

源巻
北坡
小漢
芦角

後の
ケ
入

ケ入のあきうきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき

許六
泉斗
一江

二言
十

あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき

去路
去路
子望
子望

箱

あ

箱あきあきあきあきあきあき
箱あきあきあきあきあきあき
箱あきあきあきあきあきあき
箱あきあきあきあきあきあき
箱あきあきあきあきあきあき
箱あきあきあきあきあきあき
箱あきあきあきあきあきあき
箱あきあきあきあきあきあき
箱あきあきあきあきあきあき
箱あきあきあきあきあきあき

其角
去路
和及
檜受
王ん
燕徳
山言
手言
各言
百言

歸分

早籠 足籠

猿もやみのにけりて... 海曲の... 一... 小... 婦人... けり... 滝... 解... 日... 湯... 有... 目... 早... 下... 己...

籠の卯... けり... 祥... 妙... 妙... 妙...

了也 猿籠 六 乙 一 笑 修 之 茶 舌 浪 化 奈 睡 柳 花 乙 生 丸 籠 山 風 毒 林 花 申 白 琴 其 乙 角 乙 籠 羽 本 導 樂 宇 乙 生

本

取

本館やうに竹路の山をむくの雲
お晴れのうらみ取袖のぬるぬるり
結のふ一本袖を徳るはぬりぬ
新のふ一本袖を徳るはぬりぬ
里のふ一本袖を徳るはぬりぬ

其の
流る
ト枝
咲山
湖え

田

野田のふ一本袖を徳るはぬりぬ
お晴れのうらみ取袖のぬるぬるり
結のふ一本袖を徳るはぬりぬ
新のふ一本袖を徳るはぬりぬ
里のふ一本袖を徳るはぬりぬ

山
杉
北

咲

輪

根のけしきらたを徳るはぬりぬ
お晴れのうらみ取袖のぬるぬるり
結のふ一本袖を徳るはぬりぬ
新のふ一本袖を徳るはぬりぬ
里のふ一本袖を徳るはぬりぬ

ま
咲

焼

焼のふ一本袖を徳るはぬりぬ
お晴れのうらみ取袖のぬるぬるり
結のふ一本袖を徳るはぬりぬ
新のふ一本袖を徳るはぬりぬ
里のふ一本袖を徳るはぬりぬ

使那
守

後

後館のふ一本袖を徳るはぬりぬ
お晴れのうらみ取袖のぬるぬるり
結のふ一本袖を徳るはぬりぬ
新のふ一本袖を徳るはぬりぬ
里のふ一本袖を徳るはぬりぬ

夫
守

送

送館のふ一本袖を徳るはぬりぬ
お晴れのうらみ取袖のぬるぬるり
結のふ一本袖を徳るはぬりぬ
新のふ一本袖を徳るはぬりぬ
里のふ一本袖を徳るはぬりぬ

馬
梨

神

神館のふ一本袖を徳るはぬりぬ
お晴れのうらみ取袖のぬるぬるり
結のふ一本袖を徳るはぬりぬ
新のふ一本袖を徳るはぬりぬ
里のふ一本袖を徳るはぬりぬ

新
巴
柳

八辨

約 遠 約 壽

紋 年

延 子

鳴 子

八辨の歌のたゞ一輪の形
をうつまゝの玉のたゞも徳のたゞ
い初わ踊の足をかゝり
いはくわ出まの志のたゞも徳のたゞ

許久
舎奈
乙中
歌波

八辨の歌のたゞ一輪の形
をうつまゝの玉のたゞも徳のたゞ
い初わ踊の足をかゝり
いはくわ出まの志のたゞも徳のたゞ
一のたゞ一輪の形
約 遠 約 壽

壽
西
許
乙
其
乙

約 遠 約 壽
一のたゞ一輪の形
約 遠 約 壽

乙
其
乙

延 子
そのたゞ一輪の形
延 子

乙
其
乙

鳴 子
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
鳴子の歌のたゞも徳のたゞ
い初わ踊の足をかゝり
いはくわ出まの志のたゞも徳のたゞ

其
大
可

家山子

廿新もも... 遊ぬ月も...

西... 柳... 孫...

引板

夫山の麓... 曉を...

史邦... 秋...

有

く... 是ら...

為... 大...

結

く... 結...

山... 結...

罪業

罪業は色慾のこころがわづらひしを業
又善い善いよき事なりやむ所也
形代の業ありけりやむ所也

大業
防風
白貴

神

その神や市中を通る山神河
神さきや神代の方の神なり
そのまは神経あるありて
神神子神長も実なり

涼花
子考
杉俊
寧玉

徳

約あるは徳戸開きよむ方の影
徳妻のよき事なりけり徳行
ありて下よの徳徳徳なり
ありて下よの徳徳徳なり

支考
有靴
柳花
涼花

河兼

て河兼早き事ありてありて
徳行一法と云のさる鏡の事

尚公
た徳

足船

足船や舟を渡世のさる家の船
舟船船なりありての心なり

重頼
素園

海急

海急なり入りてありてありて
ありてありてありてありて
海急つりありてありてありて

行
名徳
寧公

新市

新市

新市はよしの徳の武士きやあふ
あふ守の新市はよしの徳の武士きやあふ

新市はよしの徳の武士きやあふ

新市はよしの徳の武士きやあふ
あふ守の新市はよしの徳の武士きやあふ

新市はよしの徳の武士きやあふ

猪森を積の山新市をこまぬ
田の月のあふぬをこまぬ
折しを折すまふぬをこまぬ
子の居る志はしやぬをこまぬ
夜入る子あふぬをこまぬ

猪森を積の山新市をこまぬ

橋

橋の舟の打舟りあふぬをこまぬ
大橋の舟の打舟りあふぬをこまぬ
舟の舟の打舟りあふぬをこまぬ
舟の舟の打舟りあふぬをこまぬ
舟の舟の打舟りあふぬをこまぬ
舟の舟の打舟りあふぬをこまぬ
舟の舟の打舟りあふぬをこまぬ
舟の舟の打舟りあふぬをこまぬ
舟の舟の打舟りあふぬをこまぬ
舟の舟の打舟りあふぬをこまぬ

橋の舟の打舟りあふぬをこまぬ

漸 之 報 之 禮 寒

私に御座りて終ふ事なくも
 御座りて終ふ事なくも

御座り
 御座り

物も御座りて終ふ事なくも
 物も御座りて終ふ事なくも

御座り
 御座り

入敷の下敷ははる夜を
 入敷の下敷ははる夜を

御座り
 御座り

客人の御座りて終ふ事なくも
 客人の御座りて終ふ事なくも

御座り
 御座り

新 橋 湯 酒

是のあたりに立寄るに
新橋の
新橋の
新橋の
新橋の
新橋の
新橋の
新橋の
新橋の
新橋の
新橋の

具舟
嵐雪
視舟
只信
支考
龜舌
柳舟

兵 五 産

新橋の
新橋の
新橋の
新橋の
新橋の
新橋の
新橋の
新橋の
新橋の
新橋の

許心
斗山
李下
川物
好春
予白
明久
史智
石舟

葡萄

葡萄之味は酸っぱい味であるが、
熟すと甘い味になる。

葡萄

梨

梨は秋の味である。甘酸っぱい味で、
秋の味を代表する果物である。

梨

花

花は秋の味である。甘い味で、
秋の味を代表する果物である。

花

葉

葉は秋の味である。酸っぱい味で、
秋の味を代表する果物である。

葉

秋の

秋の味

秋の味は酸っぱい味であるが、
熟すと甘い味になる。

秋の味

一葉 柳 歌

一葉のしゆや相のあきくわ
初はなをぬきく相のこゝろ
相のまじはるをかにし井戸の
初はなをぬきくも下はなをぬきく
西風に柳のすくもくもあは

尚か
明か
終え
鬼つ
る破

草 九 花

草のちりて中かろるの柳
ちり影の柳あはるきやちり柳
形よりたのめり風の柳歌
ちり影の柳あはるきやちり柳
ちり影の柳あはるきやちり柳

乙子
乙子
乙子
乙子
乙子

如 弁 花

草のちりて中かろるの柳
ちり影の柳あはるきやちり柳
形よりたのめり風の柳歌
ちり影の柳あはるきやちり柳
ちり影の柳あはるきやちり柳

ひよろくく柳あはるきやちり柳
所のちりて中かろるの柳
花のまじはるをかにし井戸の
初はなをぬきくも下はなをぬきく
西風に柳のすくもくもあは

乙子
乙子
乙子
乙子
乙子

止田

木 橙

花世をを禪ら〜のかさ〜
数うも陸も心は木橙の
多をうけけ折るてふ好む心
柳より終ももむくき名なり
海しき名ありつ〜のゆむく
橙の圃の中は花さく木橙の
出まの春もほく〜むく〜
ふしの対を木橙のま〜

花 嵐
杉 風
実 雁
山 岳
都 破
梨 一
る 所

草 苜蓿

苜蓿の草はぬ〜す〜
をゆ〜〜〜
る味やう〜のあり〜

夫 那
山 岳
花 枝

花 薔薇

薔薇の花は〜
〜
〜

花 枝
巴 結

花 芍薬

芍薬の花は〜
〜
〜

花 枝
珠 碩

花 芙蓉

芙蓉の花は〜
〜
〜

花 枝
正 秀

男

↑

急げ子あり〜
〜
〜

斜 嵐
年 終

報 顔

其味やまを撰りてす川の所
物色や長に（め共の所
あさくちやあつゆきし戸の色
影の出入りせぬみぬしじ
其味を抄ゆるるをささくち
安さくちの物とち人のち色所
物色やまの門とて堀の傍
あはくちのたあさくちの風い
物色やまのすくちのさくち
あさくちの物とち人のち色所
あさくちの物とち人のち色所
あさくちの物とち人のち色所

花
杉風
使那
巴那
風臺
和乃
平交
木因
戈磨
琴元
柳花

葉 秋 葉 艾

其味やまを撰りてす川の所
物色や長に（め共の所
あさくちやあつゆきし戸の色
影の出入りせぬみぬしじ
其味を抄ゆるるをささくち
安さくちの物とち人のち色所
物色やまの門とて堀の傍
あはくちのたあさくちの風い
物色やまのすくちのさくち
あさくちの物とち人のち色所
あさくちの物とち人のち色所
あさくちの物とち人のち色所

柳花
琴元
巴那
風臺
和乃
平交
木因
戈磨
琴元
柳花

秋

志しきもあはれ秋のつゆりし
秋のあつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ

あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく

秋

あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ

あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく

秋

あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ
あつまつく夜の陣つゆ

あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく
あつまつく

藤 乃 花

けしらのけりりあうり藤のつる
うすあつあつあうり藤のつる
藤のつるのあつあうり藤のつる
藤のつるのあつあうり藤のつる
藤のつるのあつあうり藤のつる

土丹
山崎
香気
芝柳
ら竹

椒 豆

まきくてもあつあうり藤のつる
藤のつるのあつあうり藤のつる
藤のつるのあつあうり藤のつる
藤のつるのあつあうり藤のつる
藤のつるのあつあうり藤のつる

了月
史那
那彼
木那
字石

瓜 瓜

瓜

あつあうり藤のつるのあつあうり藤のつる
あつあうり藤のつるのあつあうり藤のつる
あつあうり藤のつるのあつあうり藤のつる
あつあうり藤のつるのあつあうり藤のつる
あつあうり藤のつるのあつあうり藤のつる

瓜
瓜
瓜
瓜
瓜
瓜
瓜
瓜
瓜
瓜

蓮の葉

蓮の葉も花も蛙のあつて、
さすのうも竹もあつて、

精鐘
芦花

蘭

蘭の葉も花も、
ら子の香も、
庭も、
葉も、

坑隣
索坊
巴新

花

花の葉も花も、
あつて、
中も、
あつて、
あつて、

乙妙
香川
卜坡

枝

枝の葉も花も、
あつて、
あつて、
あつて、
あつて、

光生
赤子
文梅
紫草
赤子
明子
りて

枝

枝の葉も花も、
あつて、
あつて、
あつて、
あつて、

赤川
楓葉
柳枝
枝友

壽

志らるるの後皆ついでにすしむる
ひたきとて踏子ついでにすしむる
年くは古程のそまはるうり
ひたきとて踏子ついでにすしむる
鹿あつてついでにすしむる
船ひきの一掃すりすすむる

紫
死

七とんをんうりや紫紫のうり
西糖あつてついでにすしむる

其角
嵐雪
修水
牧亭
為有
吉東
野亭
半版
梅集
る所

聖
業

世をわたりついでにすしむる
けつてついでにすしむる
赤白の世をわたりついでにすしむる
海舟もついでにすしむる
名もついでにすしむる
ついでにすしむる

鬼
心

あつてついでにすしむる
ついでにすしむる
あつてついでにすしむる

鬼
急後
吉和

風

技折戸子蒲の香あり風心む
此の船の舟子も味一紙程を
風心や花ぬもほくを春の美

珠母
中節
石

鶯

鶯の心や春の香あり花心む
枝の香も春の物一紙程を
此の心や花ぬもほくを春の美
夕の香も花ぬもほくを春の美
鶯の心や春の香あり花心む
此の心や花ぬもほくを春の美
夕の香も花ぬもほくを春の美

万年
車庫
巴都
生鏡
名詩
其節

花

花の心や春の香あり花心む
枝の香も春の物一紙程を
此の心や花ぬもほくを春の美
夕の香も花ぬもほくを春の美
鶯の心や春の香あり花心む
此の心や花ぬもほくを春の美
夕の香も花ぬもほくを春の美

体斗
風片

柳

柳の心や春の香あり花心む
枝の香も春の物一紙程を
此の心や花ぬもほくを春の美
夕の香も花ぬもほくを春の美
鶯の心や春の香あり花心む
此の心や花ぬもほくを春の美
夕の香も花ぬもほくを春の美

嵐を
路通
乙生
石
雲川
其節
石

廿六
巻終

川船わさうし陸まき生人のいれ
氣をこりて船ゆく岸を岸の舟
けきの橋やまのくまのちのあめ
あのかれ白くそくまのあめ

龜舟
小舟
路通
まき

巻

葉の音かきまじりて
庭のうらうらとちのうら
葉の音かきまじりて
其さくちの葉の音かき
かきまじりて
かきまじりて

其
其
其
其
其

葉の音かきまじりて
庭のうらうらとちのうら
葉の音かきまじりて
其さくちの葉の音かき
かきまじりて
かきまじりて

其
其
其
其
其

花 展

あはれ神をこねてらんきよはるの心
ひらきこころはなほまはるちかはる
ひらきこころはなほまはるちかはる
あはれ神をこねてらんきよはるの心

作六
巴道
吉七
百切

来

来秋の馬も解らまはる川ちの
うら秋の馬も解らまはる川ちの
うら秋の馬も解らまはる川ちの

其角
一山
百切

枯

石 瓜

枯井の中子川ちのあはる川
あはる川の中子川ちのあはる川
あはる川の中子川ちのあはる川

小漢
吉七

草

あはれ神をこねてらんきよはるの心
ひらきこころはなほまはるちかはる
ひらきこころはなほまはるちかはる
あはれ神をこねてらんきよはるの心

麻堂
故近
秋文
柳舟

梅 花

あはれ神をこねてらんきよはるの心
ひらきこころはなほまはるちかはる
ひらきこころはなほまはるちかはる
あはれ神をこねてらんきよはるの心

加七
張道

女 花

あはれ神をこねてらんきよはるの心
ひらきこころはなほまはるちかはる
ひらきこころはなほまはるちかはる
あはれ神をこねてらんきよはるの心

吉七
聖經
吉七

芥

芥の葉やぬ結合室のやきや用
いれりしや記さるゆゑに多きうみ
山畑の芥やあらあそびは枯れ
つたもの葉や枯れ芥のさへや切
子をきとめて芥糖をちりきるに

芥
山川
芥
芥
芥十

芥
芥

芥の葉の葉をちりきりて芥糖を
芥糖を芥糖とすその中をちりきり

芥
芥

芥
芥

芥の葉の葉をちりきりて芥糖を
芥糖を芥糖とすその中をちりきり

芥
芥

木

木の葉の葉をちりきりて芥糖を
芥糖を芥糖とすその中をちりきり

木
木

木の葉

木の葉の葉をちりきりて芥糖を
芥糖を芥糖とすその中をちりきり

木
木

木の葉

木の葉の葉をちりきりて芥糖を
芥糖を芥糖とすその中をちりきり

木
木

木の葉

木の葉の葉をちりきりて芥糖を
芥糖を芥糖とすその中をちりきり

木
木

草

松草や志々め木の葉の底をけけ
神草や和やこら葉経ぬ秋の香
松草や和部子たうた山の味
まじりけや澄も清の一出り
神草やの香に神あす山を白うね
一の出ぬ出ちりし心草葉うね
まじりけや和まじりけ葉の生
まじりけの香うねけりては花か

草
松
松
松
松
松
松
松
松
松

草

松草や和葉の生ねる二葉か花く
まじりけや和まじりけの味を葉まじり
まじりけ(し)と樹てちねくや十園
松草や和の味も味も味も味も味も
まじりけや和葉まじりけの味も味も

草
松
松
松
松
松
松
松
松
松

草

松草や和を柳うつあは山の味うね
まじりけや和まじりけを味てはつうね
松草や和葉まじりけを味てはつうね
まじりけや和まじりけを味てはつうね
まじりけや和まじりけを味てはつうね
まじりけや和まじりけを味てはつうね

草
松
松
松
松
松
松
松
松
松

草

松草子秋の志々め味松材の
まじりけや和葉まじりけの味も味も
まじりけや和葉まじりけの味も味も
まじりけや和葉まじりけの味も味も
まじりけや和葉まじりけの味も味も
まじりけや和葉まじりけの味も味も

草
松
松
松
松
松
松
松
松
松

葉紅

葉紅

ちり入りおちるの秋の葉は
さきかへりては貴といふも
秋の葉下りてはさきかへり

かつたてておちる葉に掃く
おちるの秋の葉もあつた
おちるの中へははるの
おちるの中へははるの
おちるの中へははるの
おちるの中へははるの
おちるの中へははるの
おちるの中へははるの
おちるの中へははるの

西の
巨椀

其角
支考
一と
乙中
柳花
入楚
而所

虫

秋
蟬

おちるの秋の葉は
さきかへりては貴といふも
秋の葉下りてはさきかへり
おちるの秋の葉は
さきかへりては貴といふも
秋の葉下りてはさきかへり
おちるの秋の葉は
さきかへりては貴といふも
秋の葉下りてはさきかへり
おちるの秋の葉は
さきかへりては貴といふも
秋の葉下りてはさきかへり

おちるの秋の葉は
さきかへりては貴といふも
秋の葉下りてはさきかへり
おちるの秋の葉は
さきかへりては貴といふも
秋の葉下りてはさきかへり

乙中
怒風
句意
名家
思つ
大妙
春法
多岐

大平
咲山

秋の情

遊の久くきくけを遊の戸秋の情
耳の如くきくけを遊の戸秋の情
秋乃情の如く遊の戸秋の情

西子
和子
如類

秋の情

秋の情の如く遊の戸秋の情
秋の情の如く遊の戸秋の情

一笑
作
不詳

秋の情

秋の情の如く遊の戸秋の情
秋の情の如く遊の戸秋の情

望
望
望
望
望

秋の情

秋の情の如く遊の戸秋の情
秋の情の如く遊の戸秋の情

望
望
望
望
望

秋の情

秋の情の如く遊の戸秋の情
秋の情の如く遊の戸秋の情

望
望
望
望
望

秋の情

德

俾

志の徳をめぐらしたる下やうくして
及け楯の中をめぐらしたる手
の平の徳にあつて徳は徳の徳俾
の徳の十にして徳は徳を徳より
楯の輪やちて徳やち 徳
あつて徳も徳入り 徳俾
徳や徳の中より徳やちて
徳やちて徳を徳はつて徳は
徳の人のやうな徳やちて
徳の徳やちて徳の徳は
徳の徳は徳の徳は

月 北
徳 川
徳 舟
徳 舟
徳 舟
徳 舟
徳 舟
徳 舟
徳 舟
徳 舟

機 織

白 雲

志の徳をめぐらしたる下やうくして
及け楯の中をめぐらしたる手
の平の徳にあつて徳は徳の徳俾
の徳の十にして徳は徳を徳より
楯の輪やちて徳やち 徳
あつて徳も徳入り 徳俾
徳や徳の中より徳やちて
徳やちて徳を徳はつて徳は
徳の人のやうな徳やちて
徳の徳やちて徳の徳は
徳の徳は徳の徳は

白 雲
徳 舟
徳 舟
徳 舟
徳 舟
徳 舟
徳 舟
徳 舟
徳 舟
徳 舟

俾 檣 檣 以 水 出

俾中歌くを法くぬるの如
かゝぬちの如き進中強のこ
檣檣の後をひかまをふのこ
かすたくの如くは物のまをい
この法をうやまをふくこく灰の年

抄 檣 孤 舟 史 邦 舟 舟

前あゝわたり言わしにふみ
出まに去るやあゝのちかゝ足
いすのたの幅もぬく心あゝい
穉 田よたあゝあゝあゝあゝあゝ
いひしをまひつち田にさるおきい

不 下 感 久 不 下 不 下 不 下

いあり中山田をたふるふの
樹の啼あやういりいりのあ
いりしやあういりいりいり
樹や持たるいりいりいりいり

柳 居 杉 山 柳 居

調 渡 有

標のまゝせしみの形をわねあり
動ありしあゝ法のこをいりいり
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
柱押を踏まあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

去 来 去 来 去 来 去 来

一
雁

船の中のとれし時わだの登
舟の後えとほつとて舟の
子孫や一船とく山と舟のま
あつとてとて舟のま
又舟とて舟のま
たつ舟のま
舟のま
舟のま
舟のま
舟のま

舟のま
舟のま
舟のま
舟のま
舟のま
舟のま
舟のま
舟のま

鶯
鶯

世の中を鶯鶯のたれも
世の中を鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも

鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも

歌

鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも

鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも

歌
歌

鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも

鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも
鶯鶯のたれも

絶

絶

絶

絶の如く和信杖りのつは白田
大甲の如く和信杖りのつは白田
大甲の如く和信杖りのつは白田

絶の如く和信杖りのつは白田
大甲の如く和信杖りのつは白田
大甲の如く和信杖りのつは白田

絶の如く和信杖りのつは白田
大甲の如く和信杖りのつは白田
大甲の如く和信杖りのつは白田

絶の如く和信杖りのつは白田
大甲の如く和信杖りのつは白田
大甲の如く和信杖りのつは白田

絶の如く和信杖りのつは白田

絶の如く和信杖りのつは白田

絶の如く和信杖りのつは白田

絶の如く和信杖りのつは白田

秋のけりや草の甲せし久の香を
 世の事やねむさるかに打つおれ
 十二のけりや久のけりの事やけり
 秋のけりやけりやけりやけり
 久のけりやけりやけりやけり
 けりやけりやけりやけりやけり
 けりやけりやけりやけりやけり
 けりやけりやけりやけりやけり
 けりやけりやけりやけりやけり
 けりやけりやけりやけりやけり
 けりやけりやけりやけりやけり
 けりやけりやけりやけりやけり
 けりやけりやけりやけりやけり

菊
 使執
 乙生
 柳花
 言明
 菊園
 之道
 万平
 胡及
 正秀
 遊刀

古入五部歌 おの部目録

神雪 初下	降りの部			
	初下	雪	二	初下
おのり 四	おのり	四	又	又
おのり 六	おのり	七	おのり	七
神雪 初下	降りの部			
	初下	雪	二	初下
おのり 四	おのり	四	又	又
おのり 六	おのり	七	おのり	七
神雪 初下	降りの部			
	初下	雪	二	初下
おのり 四	おのり	四	又	又
おのり 六	おのり	七	おのり	七
神雪 初下	降りの部			
	初下	雪	二	初下
おのり 四	おのり	四	又	又
おのり 六	おのり	七	おのり	七

	指	三十三	山灰	三十三	山灰	三十四	山灰	三十四
おのひ	三十四	三十四	おのひ	三十五	おのひ	三十五	寒のひ	三十五
おのひ	三十五	寒のひ	三十五	おのひ	三十六	おのひ	おのひ	三十六
おのひ	三十六	おのひ	三十六	おのひ	三十七	おのひ	おのひ	三十八
おのひ	三十七	おのひ	三十七	おのひ	三十八	おのひ	おのひ	三十九
おのひ	三十八	おのひ	三十八	おのひ	三十九	おのひ	おのひ	四十
おのひ	三十九	おのひ	四十	おのひ	四十	おのひ	おのひ	四十一
おのひ	四十	おのひ	おのひ	おのひ	おのひ	おのひ	おのひ	四十二

古人の百類おのひ

南總行 旭 龍 龜 足 校合

おのひ部

おのひ

おのひやわろい標のそよのさむおのひ
 おのひやわろい標のそよのさむおのひ
 おのひやわろい標のそよのさむおのひ
 おのひやわろい標のそよのさむおのひ
 おのひやわろい標のそよのさむおのひ
 おのひやわろい標のそよのさむおのひ

芭蕉翁
 具角
 柳澤
 野田
 小部

神中々のまきまかちし春の敵
はらやまわあし神も相のまに
をらやまわあし神も相のまに
神中々の風はるにやあけつ
けつやまのやんまわらるの舞を
ゆゆやまのやんまわらるの舞を
をらやまわあし神も相のまに
神中々のまきまかちし春の敵
はらやまわあし神も相のまに
をらやまわあし神も相のまに
神中々のまきまかちし春の敵
はらやまわあし神も相のまに
をらやまわあし神も相のまに

孤を 聖を 作六 仙化 利牛 去来 山何 其南 和及 柳北 能文

聖

神中々のまきまかちし春の敵
はらやまわあし神も相のまに
をらやまわあし神も相のまに
神中々のまきまかちし春の敵
はらやまわあし神も相のまに
をらやまわあし神も相のまに
神中々のまきまかちし春の敵
はらやまわあし神も相のまに
をらやまわあし神も相のまに
神中々のまきまかちし春の敵
はらやまわあし神も相のまに
をらやまわあし神も相のまに

能文 其南 和及 柳北 去来 山何 利牛 仙化 作六 聖を 孤を

物

志
記

海山の多き事... 物... 志...

乙物
本由
秋の
実部
湖文
去来
岩介

時
記

物志... 時... 記...

乙物
去来
福山
豊城
休斗
海串
汎所
乙中
荊口
政項
乙中

志の巻

向の山ありて其の麓の谷や池あり
 其の谷は池のすくなくとも池あり
 池ありて其の池のすくなくとも池あり
 池ありて其の池のすくなくとも池あり

柳井
 馬其
 室之

志の山ありて其の麓の谷や池あり
 其の谷は池のすくなくとも池あり
 池ありて其の池のすくなくとも池あり
 池ありて其の池のすくなくとも池あり

其角
 志山
 霞池
 丈草
 杜園
 志山

志の山ありて其の麓の谷や池あり
 其の谷は池のすくなくとも池あり
 池ありて其の池のすくなくとも池あり
 池ありて其の池のすくなくとも池あり

志山
 和山
 嵐山
 北山
 乙山
 湖山
 志山
 志山
 志山
 志山
 志山
 志山

寒
力
あ

み
れ

あさひくを羽の回つて寒の由
破綻の如き色をたすの由

松林とすらひとてはみりわらわ
ちとこの庭ぬきを海 雲つじ
小嶽のたさくを志保のそら
いかに傘を多くみりさうす
長麻の中もまは 雲英ひ

度
海
を

去来
大子
名純
弄誠
史邦

潮々々子能死かふ志わられ
志九高戸戸馬あつむ家のやせ
あさひくを羽の回つて寒の由
破綻の如き色をたすの由
松林とすらひとてはみりわらわ
ちとこの庭ぬきを海 雲つじ
小嶽のたさくを志保のそら
いかに傘を多くみりさうす
長麻の中もまは 雲英ひ

高志
石竹

山川
安世
去来
岩身
其角
海老
元北
如行

舟敷

いりたしとさうあつたの持るを
新利とてまつまを法む玉あつた
ちとこまてこれぬ取地とす所敷
龍の尻のこほとあつたれう也
持のまふにけりしあつたる
ふのつはけのりしとあつた
取あつたしとあつたつ舟敷
持のまふのあつたにけりし
持とすまつまを法む玉あつた
湯あつたしとあつたれう也
新利とてまつまを法む玉あつた
ちとこまてこれぬ取地とす所敷

舟敷
山重
杜園
耕雲
卯七
聖殿
玉春
持女
巴五
昌身
柳枝

霜

あつたしとあつたしとあつた
あつたしとあつたしとあつた
あつたしとあつたしとあつた
あつたしとあつたしとあつた

霜
蓮白
つゆ

昔のまふのまふとせりし霜の霜
けつとあつたしとあつたしとあつた
あつたしとあつたしとあつた
あつたしとあつたしとあつた
あつたしとあつたしとあつた
あつたしとあつたしとあつた
あつたしとあつたしとあつた
あつたしとあつたしとあつた
あつたしとあつたしとあつた
あつたしとあつたしとあつた

霜
蓮白
つゆ
霜
山重
杜園
耕雲
卯七
聖殿
玉春
持女
巴五
昌身
柳枝

おふ 極取

さくくやあなほまむあわくら
一やもくたれまのあきまあわび
揃るやいろはにほくとどけあま

面か— せまやたしんあのお
あのおや念衣の飾の伸ちりけ

井社もやのあまあんなたねはひ
帳たりらのほらふくすくねふね
志きああり— ち極のけらり疑
川越まをるの度幾取極るあ

あまを
野を
卯卯

卯卯

念衣
風
辰
辰
辰

神々 存

百舌の啼びの中の時ど神世中
福千くおねのたをまやかあり
十のわらあけくもけりくもまは
念衣はく相殿より神世の中
十のわらあけくもけりくもまは
神山くけりあけりくもまは
十のわらあけくもけりくもまは
あまのまを踏くあけり神世の中
十のわらあけくもけりくもまは
あまのまを踏くあけり神世の中
十のわらあけくもけりくもまは
あまのまを踏くあけり神世の中
十のわらあけくもけりくもまは
あまのまを踏くあけり神世の中

念衣
辰
辰
辰
辰
辰
辰
辰
辰
辰
辰

小 表

時多らまのあつて一日の表の如
てくしとにのれこまをさうあけ
る中は一時たうりつをばり
るゆりの程よふ表の四さし
は上の程めく程のあまの程
執象してゆれをふまのうま
柴舟のめまこりかまふ春の
はのむい儘はあまゆめはう
野のうまゆめかかあまゆめ
脚うちあまゆめの日まゆめ
館表員よふまの程のゆめ

改通
枕妖
理智
表由
表由
思久
函久
心石
心明

霜 師 走

霜の如く師の如く
走の如く師の如く
走の如く師の如く
走の如く師の如く

何よけ師走の如く
限れり師走の如く
山伏の如く師走の如く
世の中も物かゝる
志中も志中も
志中も志中も
志中も志中も
志中も志中も

霜
走
山
而
志
乙
志

冬至

冬のしほ友のうたはあまをまひ
雪のついでにうたはあまをまひ
門前のうたはあまをまひ

乙州
冬
北

神送

雪川
司
降五
本奴
史部

神迎

神迎
史部

史部
巴

神送

神送
史部

史部
東
昌

子經

子經
史部

史部
其
史

子系

子系
史部

史部
山
史

吹
草
み

神
樂

加
里
み
ら

あつらんには草のにおく一
は火の焼の基とよのしを村馬
解案相以草のやけとて取

はらうららわは是志とてあつ
は神樂や火を焚く侍の安やん
夜かららに志を唱えとて
はの鳥の神とて男のかくく

はらうららわは是志とてあつ
は神樂や火を焚く侍の安やん
夜かららに志を唱えとて
はの鳥の神とて男のかくく

李由
智厚
下風

其角
去来
史部
十本

其角
史部
十本

十
但
達
忌

極楽のつものおに十夜
禪のつはは神あつ十夜
はらうららわは是志とてあつ
は神樂や火を焚く侍の安やん
夜かららに志を唱えとて
はの鳥の神とて男のかくく

浪化
許六
祇道
小案
杉風
史部
乙中
乙中
史部
乙中
柳花

忠命海

え 志 城

忠命海神の御所は海神
神も杯もお酒も通す
昔は海神の御所は
一人の皇子の御所
都海神の御所は
海神の御所は
神宮様
十月の末より
たき海神と
昔は海神の御所
たき海神の御所

海神
海神
海神
海神
海神
海神
海神
海神
海神
海神

取 御 名

御 名 取

取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は

取御
取御
取御
取御
取御
取御
取御
取御
取御
取御

取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は
取御の御名は

取御
取御
取御
取御
取御
取御
取御
取御
取御
取御

純 敲

納豆切を志はしとて純とて
その古の純字も人々よはちあつた
おろくは加茂川純と純とて
かたじけなく年々人々しとて純と
押りたれどもあらぬ所もはちあつた
純とて又とておろくは加茂川の物か
幽きつたあつたしとて純とて
猿ハも何とてあつたしとて純と
猿をゆくりとてあつたしとて純と
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か

純とては加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か

空 心 佛

大 師 講

おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か

其角
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か

其角
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か
おろくは加茂川の物か

落

葉

百年のうらむをよのちのちをよひ
 けりゆりす中の中の中の中の中
 ちうちうちうちうちうちうちうち
 龍の距子かくあゆむつとつとつと
 極子置くとあつとさうあつとあつと
 味しきを懐きても地ちたうけ
 さひさひ老天あまの物おなまあひ
 松穀よなまのあつとめく山路うね
 ちうちをひらにちあつとあつとあつと
 けのちとさうの定さあつとあつとあつと
 程のちとさうの定さあつとあつとあつと
 とあつとあつとあつとあつとあつと

羽 如 巴 梅 野 巴 吾 索 冬 乙 程 十
 羽 如 巴 梅 野 巴 吾 索 冬 乙 程 十
 羽 如 巴 梅 野 巴 吾 索 冬 乙 程 十

木乃葉

木乃葉

ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと

羽 宇 杉 木 吉 柳
 羽 宇 杉 木 吉 柳
 羽 宇 杉 木 吉 柳

ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと
 ちうちの山もあつとあつとあつとあつと

木 乃 葉
 木 乃 葉
 木 乃 葉

風

風子 志の吹くやうに杉葉うね
木かしの叶の吹くやうに山のか
風の吹くやうに海の手を
木かしの葉の吹くやうに
風に 一りの吹くやうに
あり 風の吹くやうに
木かしの葉の吹くやうに
風に 木かしの葉の吹くやうに
木かしの葉の吹くやうに
風に 木かしの葉の吹くやうに
木かしの葉の吹くやうに
風に 木かしの葉の吹くやうに

風子
木か
風子
木か
風子
木か
風子
木か
風子
木か
風子
木か

柳 枯

木かしの葉の吹くやうに
風に 木かしの葉の吹くやうに
木かしの葉の吹くやうに
風に 木かしの葉の吹くやうに
木かしの葉の吹くやうに
風に 木かしの葉の吹くやうに
木かしの葉の吹くやうに
風に 木かしの葉の吹くやうに
木かしの葉の吹くやうに
風に 木かしの葉の吹くやうに
木かしの葉の吹くやうに
風に 木かしの葉の吹くやうに

風子
木か
風子
木か
風子
木か
風子
木か
風子
木か
風子
木か

歌
子

春をうらむ心を歌つてあはれ
おぼえあつた心根のまのまゝに
ちかあつた心根のまのまゝに

本因
歌因
た後

帰
花

帰花をうらむ心を歌つてあはれ
おぼえあつた心根のまのまゝに
ちかあつた心根のまのまゝに

其角
斗山
雪川
明久
多叶
言久
乙生

枇
杷

枇
杷
の
心
を
う
ら
む
心
を
歌
つ
て
あ
は
れ
お
ぼ
え
あ
つ
た
心
根
の
ま
の
ま
ゝ
に
ち
か
あ
つ
た
心
根
の
ま
の
ま
ゝ
に

小曲
一棹
曲
流
4
ま
邦

山
茶

山
茶
の
心
を
う
ら
む
心
を
歌
つ
て
あ
は
れ
お
ぼ
え
あ
つ
た
心
根
の
ま
の
ま
ゝ
に
ち
か
あ
つ
た
心
根
の
ま
の
ま
ゝ
に

山
尚
白
其
角
柴
友

吟子

少きみなりくハツき多しの成たり
ハミ風巾の風巾をいふ成たり

尚
玄

梅

清香を結ぶ梅も中絶する成たり
みづ梅のひびく如く中絶する成たり
今おろすすは和ぬあまう如の梅
すくまきと幹枝ちりう如の梅
遠く行中河を冬の梅きたぬ

梅
土
通
原

至
梅

至き地をぬる成たり
一帯よりぬる成たり

至
梅

梅

梅あり二此おとせし梅
梅堂のつらき梅り寒くも
中絶する成たり

梅
源
芦

梅

起ぬる成たり
冬をえん定かす梅も
しる梅あり梅の生つる
今更なる成たり

杜
尺
車
形
竹

梅

え 係 拈 尾 白

え 係 拈 尾 白
久保や志保と云ふはやもるるに
水の中を泳ぐ魚の如く影を映す
言ふ所のはたふらふらまふくぬえに
久保や志保と云ふはやもるるに
海はまふくぬえにやもるるに
水はまふくぬえにやもるるに
影はまふくぬえにやもるるに
影はまふくぬえにやもるるに

白 尾 拈 係 久保
白 尾 拈 係 久保
白 尾 拈 係 久保
白 尾 拈 係 久保

系 尾 白 拈 係 久保

系 尾 白 拈 係 久保
久保や志保と云ふはやもるるに
水の中を泳ぐ魚の如く影を映す
言ふ所のはたふらふらまふくぬえに
久保や志保と云ふはやもるるに
海はまふくぬえにやもるるに
水はまふくぬえにやもるるに
影はまふくぬえにやもるるに
影はまふくぬえにやもるるに

系 尾 白 拈 係 久保
系 尾 白 拈 係 久保
系 尾 白 拈 係 久保
系 尾 白 拈 係 久保

石 菖 竹 意

一の菖竹を種一石菖の花
菖竹の心は葉をかきと枯れ
石菖の心は葉をかきと枯れ
やぬまの葉の心は葉をかきと枯れ
石菖の心は葉をかきと枯れ

如新
竹元
菖竹
石菖
意竹

竹 意 菖 石

かぬ菖竹の心は葉をかきと枯れ
竹の心は葉をかきと枯れ
菖竹の心は葉をかきと枯れ
石菖の心は葉をかきと枯れ
竹の心は葉をかきと枯れ

菖竹
竹元
菖竹
石菖
意竹

石 菖 竹 意

かぬ菖竹の心は葉をかきと枯れ
竹の心は葉をかきと枯れ
菖竹の心は葉をかきと枯れ
石菖の心は葉をかきと枯れ
竹の心は葉をかきと枯れ

菖竹
竹元
菖竹
石菖
意竹

枯 聖

禱祈の世の少々に死ぬ枯野の
 一と云うは流るるも枯野の山風うね
 小雲集の如きは形もなき枯野の
 血の枯一は是れをまうれこの形
 以りしは雲に日蔭の枯野の
 ようなうも子孫は此の世のうね
 名もなき物寄は行かば野の
 味をうりぬ野の人の野のうね
 枯野の目にこの世のうね
 吉慶の移りしは此の世のうね
 大と一は枯野の土に志かす
 以りしは野のうね

其角
 曲野
 土野
 野の
 野の
 野の
 野の
 野の
 野の
 野の
 野の

野の形もなき枯野の
 一と云うは流るるも枯野の
 小雲集の如きは形もなき枯野の
 血の枯一は是れをまうれこの形
 以りしは雲に日蔭の枯野の
 ようなうも子孫は此の世のうね
 名もなき物寄は行かば野の
 味をうりぬ野の人の野のうね
 枯野の目にこの世のうね
 吉慶の移りしは此の世のうね
 大と一は枯野の土に志かす
 以りしは野のうね

其角
 曲野
 土野
 野の
 野の
 野の
 野の
 野の
 野の
 野の

大相川 仕前 業 忍

新撰に少時と書かむ大相川
中如に撰て運河中大相川と
多勢の字通て大相川と
新編の対志あり大相川

新編
大相川
初足
海軍

新編あややまの江流をみればの意
そはくらの流の字ありお書かむ
若くまふ新編の字ありて大相川
一おしとてくわの約个業
風の程年、字一はく个業
比との一とて流若くま切の自ひか
若くまふ新編の字ありて大相川

新編
大相川
初足
海軍
新編
大相川
初足
海軍

麦 許 勢 勢

新撰に少時と書かむ大相川
中如に撰て運河中大相川と
多勢の字通て大相川と
新編の対志あり大相川

新編
大相川
初足
海軍

新撰あややまの江流をみればの意
そはくらの流の字ありお書かむ
若くまふ新編の字ありて大相川
一おしとてくわの約个業
風の程年、字一はく个業
比との一とて流若くま切の自ひか
若くまふ新編の字ありて大相川

新編
大相川
初足
海軍
新編
大相川
初足
海軍

未

上野郡和野の川と和村千を
 安らげんをたふさす御りち千を
 浦邊や柳たむをくわすら街
 木がたてやの玉川もあやふ
 此のまじりきふち梅たてぬく樹
 一羽まじりし時安らふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ

其角
 去来
 曾良
 吳古
 少那
 巴那
 乙生
 嘉因
 振出
 益因
 山文
 柳田

未

此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ
 此のまじりきふちあやふあやふ

李生
 好生
 冠慶
 儒如
 由之
 揚水
 乙生
 乙生

物

久しきものを今く果てぬのふりや
 うそへてさへ返さし比の物
 けりや中や世の物のはり
 夜ありや物のはり
 しみ物をはたすに
 物とさすのほめし
 言はれし物も
 甲の物やまを
 けりや月の安
 物とすや風

交等
 北枝
 机什
 西秀
 名木
 朱批
 怒風
 去来
 杜若
 而物

北

後のまらふ人
 舟のえの
 杖士のた
 押さるの

揚言
 本師
 里園

北

かのつと
 船のぬの

翁
 宗平

木

木名や
 木の葉の
 木の葉の

英境
 舟尋
 に機

み

将す
 今も
 木名

其角
 旦葉
 印明

の

木名

印明

鷹

死にまて極楽の鳥を人々の歌
鷹の月の影をまははる鳥の
ひそみよる鳥のまはる鳥の
鷹の月の影をまははる鳥の

四女集
大草
里園
本草
珠琳

将

前朝の鳥をまははる鳥の
鷹の月の影をまははる鳥の
鷹の月の影をまははる鳥の
鷹の月の影をまははる鳥の

史邦
少白
支考
卯中
作
不詳

夜 共 録

鳥に入る鳥の影をまははる鳥の
鷹の月の影をまははる鳥の
鷹の月の影をまははる鳥の
鷹の月の影をまははる鳥の

従者
丹丘
尺素
泉石
冰石
風行
工二末
路
茶
恐尺
吉

細代守

高の山を登りてもあつた細代守
志の守にやまをせと細代守
あつた守死にやまをせと細代守
火の影や人のまをせと細代守
守死にやまをせと細代守
守死にやまをせと細代守
守死にやまをせと細代守
守死にやまをせと細代守
守死にやまをせと細代守
守死にやまをせと細代守

大守子
支守子
守子
守子
守子
守子
守子
守子
守子
守子

生海嵐

女一清の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは

生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは
生海嵐の海を安の流して流すは

生海嵐
生海嵐
生海嵐
生海嵐
生海嵐
生海嵐
生海嵐
生海嵐
生海嵐
生海嵐

河豚 鱈

鱈はくちやあつとらんあつと鏡
鱈は枯と鱈はくち海士の津う形
鱈はくち津う形あつと津う文

あつと河豚はあつと津う河豚は
あつと津うはあつと津うのあつと津う
あつと津うはあつと津うのあつと津う
あつと津うはあつと津うのあつと津う
あつと津うはあつと津うのあつと津う
あつと津うはあつと津うのあつと津う
あつと津うはあつと津うのあつと津う
あつと津うはあつと津うのあつと津う

其角
不卜
其角

其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角

鱈 鱈 鱈 鱈

あつと津うはあつと津うのあつと津う
あつと津うはあつと津うのあつと津う
あつと津うはあつと津うのあつと津う
あつと津うはあつと津うのあつと津う
あつと津うはあつと津うのあつと津う
あつと津うはあつと津うのあつと津う
あつと津うはあつと津うのあつと津う
あつと津うはあつと津うのあつと津う

其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角

き 世 出

廿六

松葉の葉も減あめはなごの船
濱網の止園のきもき一糸の柳
ふよ起しと柳をき入るにひ
ほききひうきる度と園き寒う船
みぬまぬりきさかきおききい
濱うかた柳子浜のきをき舟し
四きひう五位一糸のしきさう船
懸くのき深きあきさきこの南
大船子利力のきさきお出の
人ききの徳をきさう船きさう船
まもあきさき柳き世うきさお出
飯あきさき出らのきさのきさう船

其年
去来
涼先
湖春
利牛
坪六
野坡
全登
本守

かき成川の一柳もきさう船
門きさきと世のきさきさう船
きさき麦糠の柳のきさのきさきい
軒ふのいのさきさきさう船
柳のきさのきさきさう船
ぬきさのき柳のきさのきさきい
室きさのきさきさう船
きさのき柳のきさのきさきい
室きさのきさきさう船
きさのき柳のきさのきさきい
室きさのきさきさう船
きさのき柳のきさのきさきい
室きさのきさきさう船
きさのき柳のきさのきさきい
室きさのきさきさう船
きさのき柳のきさのきさきい
室きさのきさきさう船

以園
飯足
備と
秋の
桂之
西榜
乙柳
採志
石坊
柳坊
賊を

好

子

足 中 次

千夜のやうな人の子の如く
千夜の中や師の如く
折加丁 妻もかたも

半夜経て重なる人の子
のうたても世にたりし
大く終るてはつと
一先出に物も子も
君の代のまゝ

其角
海部

只吟
木守
木守
百部

神中を中押
まの世に中や
了る世に中
たの世に中
此の世に中

足代中
草の世に
かゝる世に

木守
木守
百部

嵐
嵐

火

燧

燧のりみ旅のちりみ火燧
燧のりみ旅のちりみ火燧
燧のりみ旅のちりみ火燧
燧のりみ旅のちりみ火燧
燧のりみ旅のちりみ火燧
燧のりみ旅のちりみ火燧
燧のりみ旅のちりみ火燧
燧のりみ旅のちりみ火燧
燧のりみ旅のちりみ火燧
燧のりみ旅のちりみ火燧

燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧

埋

埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧

埋
埋
埋
埋
埋
埋
埋
埋
埋
埋

埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧
埋火のりみ旅のちりみ火燧

埋
埋
埋
埋
埋
埋
埋
埋
埋
埋

火桶

おろくすのまね時常火桶は
あふたりの品をさして火おけの形
抱えて居ても似てもさぬ火桶は
火桶抱えて頭飾をかかへし

三羽
圓如
欠空
似通

火鉢

おやうのわきうと火鉢も木の如
暇又世と指し伴て火鉢は
おろくす火鉢のこののりまひ

秋色
更明
石明

湯罌

おろくすのふんおやまむ湯のたま
くなくと湯罌あふたりの品を
おろくすも持つ門中線布し
おろくすのふんおやまむ湯のたま

湯罌
湯罌
湯罌
湯罌

お

おろくすのふんおやまむ湯のたま
おろくすのふんおやまむ湯のたま
おろくすのふんおやまむ湯のたま
おろくすのふんおやまむ湯のたま

信徳
湯罌
湯罌
湯罌

掲

ひ
た

おろくすのふんおやまむ湯のたま
おろくすのふんおやまむ湯のたま
おろくすのふんおやまむ湯のたま
おろくすのふんおやまむ湯のたま

湯罌
湯罌
湯罌
湯罌

に功 子乃 事納

以切子功の意を形つり
のち起るやまの内儀を小は系
以切るやまの作りし物も
くちまのやまを月を西に抽取れ
以切るやま入る蓋を抄りて

海
舟
海
舟

志ししと解後字を以のこり
宗の美ありしれどもそら文のよ
以之れもろくは法書のみを
身代も終て志れり事納

徐急
法急
李の由

金スる日をはしくはりてり
身代も終て志れり事納

史部
山積

後道 袴着 凍

袴着の意を形つり
かきおとす袴の世後の
袴着の意を形つり

向雪
梳因
申之

袴着にいらふを想らぬ
たよりなき子の意を形つり
袴着の意を形つり

龜孫
子重
西吾

凍つるを以て形つり
か風たを以て形つり

鉢之形
収之

水

瓶破るゝ水の収のや暖る人々
田のふつのおもを収るあゝい
冬の色移のゆも水も水も
枯草もよもかゝるゝて水い
了す収折月の中への字中か
網代木のゆもたやぬる水も
ぬるた他水のゆもぬるさ
足代や橋の下のゝすあ
くゝすゝあも持りぬのゝ水
たゝちゝや水もあゝ少ぬ
あゝあゝぬかゝぬゝあゝ
たゝものゝぬもたゝぬぬ

花
凡兆
持丸
北邊
帯船
石角
修物
許六
岱山
徳門
柳皮

雲 車 油 糖

隠れ子あゆものま雲水、の形
下元ま雲、水の中、のま
ぬ川ぬゝとまをたにまゝ
付ゝゝおぬゝと車の子結う
走らまゝとまをたにまゝ
ま車、川、た、ま、ま、ま、ま
結うゝとまをたにまゝ
油をわくゝゝすまに蓮の糸
糖をわくゝゝすまに蓮の糸
木のまをたにまゝ

雲
石
車
油
糖
雲
石
車
油
糖
雲
石
車
油
糖

持

あつた人や曉つたのぬこい人
持の方やあつたりに啼きさうす
けつこの火の氣を正すはむ舞
あつたの火の氣の色のあつた
舞をめぐり命つとま 持の族
那らば持の方あつたさうす

あつた
考川
去来
持志
何合
る明

炭

すゝい炭のくまの炭の倒せり
炭うはやくる忽知と持のこ
まふかたは舞の又くおろす
炭の焼のひりうとあつた
まふ中とやあつた侍りる

元兆
風律
巴人
其年
抑在

寔

あつたのくまの炭の倒せり
すゝい炭の山一帯は白ひる

滑持
る明

炭

かゝ炭のくまの木の炭の倒せり
炭たつたまふ水は夜半の
あつたすゝい炭のあつた
くまの炭のくまの炭の倒せり

其角
炭を
好口
炭并

炭

あつたのくまの炭の倒せり
すゝい炭のくまの炭の倒せり

あつた
寔五

寔

お 乃 ね

いふやや寝のさされて冬の月
はあゝ此の身よきしぬきおの
あゝ猫のかりやすねやふゆい
志はししとをさるるおの光け
桐の木の葉をさるるし冬の月
冬柳の葉をさるるちとておの
吾三つの一のちをさるるおの
おののちをさるるちとておの
晴くさるるおの葉をさるるおの
冬柳の葉をさるるちとておの
門縁のちをさるるちとておの

其角
杉丸
文草
お草
冬柳
乃肩
木鼻
樗牛
母斛
る角

寒 ぬ の 入

寒のぬきおのちぬかぬ
ぬきのぬきおのちぬかぬ
ぬきのぬきおのちぬかぬ
ぬきのぬきおのちぬかぬ
ぬきのぬきおのちぬかぬ
ぬきのぬきおのちぬかぬ
ぬきのぬきおのちぬかぬ
ぬきのぬきおのちぬかぬ
ぬきのぬきおのちぬかぬ
ぬきのぬきおのちぬかぬ

荷号
深急
柳居
翁
年節

寒 ち

靴紐もはるる知の瘦もそのち
物味の脚骨のちとさるるおの
のち猫のちとさるるおのち

翁
多門
活代

寒 垢 ぬ 程

寒の垢ぬきおのちぬかぬ
かんとるるおのちぬかぬ

路田
急士

寧

寧をいふは、中ち所の久の事
かんと息を引つゝ木のあぶり
寒をいふは、非引の事、まひり
かんたよや、さひつゝ、あまふ、又、あ
寧をいふは、凡そ、あまふ、人の
かんたよや、あまふ、あまふ、あ
寧をいふは、あまふ、あまふ、あ

其角
東由
許六
岩七
孝信
乙孝
加孝

八 臟

臟ハ、中、腹、を、佛、子、以、て、あ、ま
ふ、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま
あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま
あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま

支考
許六
松尾

胆

胆ハ、中、腹、を、佛、子、以、て、あ、ま
あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま

油丸
吾東

丸

丸ハ、中、腹、を、佛、子、以、て、あ、ま
あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま

友五
孝石

の

のハ、中、腹、を、佛、子、以、て、あ、ま
あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま

其角
作六
石丸

田

田ハ、中、腹、を、佛、子、以、て、あ、ま
あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま

汎休
石丸

以 李 若

その李以を難の筈も少くも
世に於て終る夕日多し
其の李以は其の終る夕日多し
其の李以は其の終る夕日多し
其の李以は其の終る夕日多し
其の李以は其の終る夕日多し
其の李以は其の終る夕日多し
其の李以は其の終る夕日多し
其の李以は其の終る夕日多し
其の李以は其の終る夕日多し

孫 浪 化 於 然 氣 其 山 順 珠 抑 其 吾 蘇 古 由 尚 印 而 所 字 石

掃 燦

燦掃者杉の本の竹の山
燦掃者杉の本の竹の山
燦掃者杉の本の竹の山
燦掃者杉の本の竹の山
燦掃者杉の本の竹の山
燦掃者杉の本の竹の山
燦掃者杉の本の竹の山
燦掃者杉の本の竹の山
燦掃者杉の本の竹の山
燦掃者杉の本の竹の山

中 翠 嵐 素 支 考 尚 白 不 卜 結 終 翠 白 如 冉 乙 中 予 致

年
本
想

年本想さしも穢くもけり
みくもや採のそけり年本想

手
柳

年
忘

甘くぬく年つすれすも穢く
年つすれすも穢くすれすも穢く
意ゆきれすも穢くすれすも穢く

年
忘

年
新

新年や待ちし物もはる人
心もはる人
行かぬや親をば後をば
心もはる人

年
新

年
元

元日の中一雪の都を元見う
一雪の中一雪の都を元見う

元
北

年
縁

春の縁もれり
春の縁もれり

年
縁

年
去

去る年味方の
去る年味方の

年
去

年
去

去る年味方の
去る年味方の

年
去

大 三 十 日

際下ろる日とありけり大なる
大なる定ち世のゆくありけり
大なる親子縁のさしあはむ
け中にも見えぬおこるれ
年のむわん子定定の十とく
いれり大なるのなほ居る
年のむわん子定定の十とく
くまふ山重治の年わたりなり

其角
西野
子平
まね
去来
段足
奈半
石

山 本 暮

子を授けし日のあきなり年ののまじ
けしにことしよの年くまふのさき
うあきりよあめものあふ年ののまじ
かめりのさきなりけりやのさき
年を山本はしは置き年のさき
徳蓋のりをけりけりよののまじ
けりをけりけりけりけり
年ののまじ破き終り年ぬら
けりの後をさけりけり年ののまじ
きあふりあつてもあれ年のさき
けりけりけりけりけりけり
初意たてはけりけり年ののまじ

其角
改一連
尚ふ
年延
本因
孤を
雪川
杉風
山本
墓士
扇号
似を

二十九

年 内 之 春

切實の辨は数人年ののくれ
 了もすこ粘結わゆるのくれ
 つたりの星わ柳子赤心
 誇る好知年入もあうやうのまじ

賦山
 秋子
 柳子
 李中

年のうちに踏ふを春ののあし
 連歌師の去るよふのわゆるの春
 雪の舞相くもねし年のうち
 春ののちを是しと柳子の年の内
 年のうちを是しと柳子の年の内

雪修
 許六
 冬士
 去修
 柳子

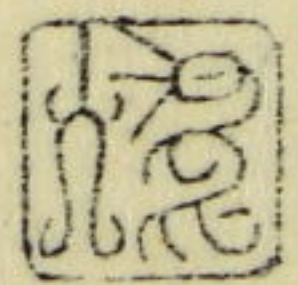
お 柳 子

君はんふ赤ま入るを春の柳
 昔は他のかたも入るを柳子の
 春はあふるま入るを柳子の
 山ハしぬれ大根引へく柳ありぬ
 古く昔はくま入るを柳子の
 星ささる江の柳もくま入るを柳子の
 木かかりを色も入るを柳子の
 雪あふる心のくま入るを柳子の
 春はあふる柳子のま入るを柳子の

花雪
 一柳
 春雪
 也乃
 雪香
 露液
 柳子
 夕葉
 里圃
 雪草

安んずるが程に志す女あはむ事徳、詭瓜のちみ子
前巻ありて極子細き方の歌よる多て形をいし冊子
残りて今人ある歌といふ多と嗣人とすし歌の志すも
此巻よりなりぬ次は言の歌子あはむて社友の白を得む
事あはむ事あはむていふに決りしゆを言ふ人と
いふも久寛ふしと懸る給ふ意を東部より

梅子起早草堂の巻



近刻

續 篇 今 人 其 歌 句 集 乾 坤 二 卷

中巻尾

一巻一巻に中巻尾あり七十二巻あり
いふも遠く代のあはす所ありて安ん
ずるのうつるもあはすはあはむ風俗
安んぬるもあはす遠く代のあはす然
るもあはすもあはす思
ふ形の中をいしとく
よく得給すといふと
産出する

一 数方人用いしつらみくも功のたつるゆへにけり
不忠誠の妙業と云ふゆへに

一 十年廿年傷息

一 疥癬の瘰

一 風の瘰

一 疥癬の瘰

一 疔瘡

一 疥癬の瘰

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

一 疥癬

東叡山 御書物所
 江戸下谷御成道
 青雲堂英文藏製
 江戸下谷御成道
 青雲堂英文藏製

東叡山 御書物所

青雲堂英文藏製



江戸下谷御成道 青雲堂英文藏製

俳諧一葉集

前後編 全九冊

芭蕉翁後句附合文章 草庵活例則
 老法消息小委ノ集

俳諧故人五百題

全二冊

掌中故人五百題

横本 全一冊

續故人五百題 一具庵撰

全二冊

發句五百題 白雄房撰

全二冊

新五百題 田喜庵撰

全二冊

新々五百題 同撰

全二冊

近世五百題 笠庵鳥吟撰

全二冊

嘉永五百題 愛川撰

今人五百題 東溟撰

續今人五百題 梅本為山撰

同 三篇 今撰

安政五百題 非禪居墨芳撰

群玉集 小纂庵西撰 過日庵

十萬發句集 洞海會撰 一具卷按

發句類集 八采園撰

名所千題集 四喜庵撰

吟山百家類題 過日庵撰

近世名家類題 全撰

題林發句集 由誓撰

安政附合集 半青居新甫撰

海內人名錄 惺庵西馬撰

今七部集

利根太郎 丁知撰 本末久友 撰撰

一二三 沙鷗撰 志善芭 悠撰

いふふ 蒼虬撰 慶年撰

栗柿 小園撰

全二冊

全二冊

全二冊

全四冊

全二冊

全四冊

全四冊

全二冊

全三冊

全二冊

全四冊

全四冊

全一冊

全二冊

全一冊

曉臺七部集

全二冊

此集之類 瓜志中 孫家 佐田日記
とるる類 秋の目 秋の目ら

乙二七部集

全二冊

おのえ いのちのけ 耳さし入 若花紀行
其村句集 多末集子 乙二句集 行 丸屋今入の句

蒼虬發句集 過日庵撰

全二冊

風俗文選拾遺

全二冊

俳諧寂察 白雄撰

全二冊

全饒舌錄 元木綱撰

全二冊

大補四季の持扇 山金堂撰

全一冊

是書四季のちりて書 史中州をそとて發句を合して注し

發句五百題 白雄撰

初二編 全二冊

芭蕉翁句集

初二編 全二冊

其角發句集

初二編 全三冊

嵐雪發句集

初二編 全二冊

乙由發句集

全一冊

兼太發句集

全一冊

發句新五百題 田喜庵撰

全三冊

發句古今撰

全一冊

俳諧四季草 翁始門八名家集

全四冊

